

患者の主体性を支える 作業療法

特集にあたって

人は1人では生きていけない。また、人は作業なしでは生きていけない。作業を行うことで、自分らしさを確認し、生きる糧を得、役割や価値、自己と他者等、社会人として・個人としての存在を自覚できる。その中でのOTの役割は、「作業」の保障につきる。「ひととは作業をすることで元気になれる」という作業療法の理念は普遍的であり、OTは、それを具現化できる人材であり続けなければならない。

さて、作業療法が日本に誕生して50年が経過する。この間、作業療法を取り巻く環境は激変した。人口構造の変化、地域格差、経済状況、グローバル化、法制度等々、さまざまな要素が重なり、将来を予測することは容易でない。その中にあって、「地域包括ケアシステム」の推進は次世代の社会保障の基幹となる施策である。OTも、積極的に社会保障の一翼を担っていかなければならない。

本特集は「患者の主体性を支える作業療法」であるが、もとより作業療法の骨幹をなす考え方であると信じている。しかし、先のさまざまな要素の中で、作業療法が時間や、人的、物理的環境で評価される時勢で、いつの間にか、患者、利用者の生活に寄り添う姿勢が薄れているように感じる。今後の社会保障費の効率的な運用の中で、このままの作業療法では社会から必要とされなくなるのではないか。何とかしなければという危機感でいっぱいである。

そのような意味で、本特集は作業療法の本質を見直そうとする意欲作である。基本的な知識、実践、元患者さんを含めた事例検討等、主体性を意識した内容である。本特集が、1人でも多くのOTの心に響き、その先に、患者の主体性に基づく作業療法が展開されることを願っている。

(中村春基)

企画担当

中村春基 (一般社団法人 日本作業療法士協会, 作業療法士)

香山明美 (みやぎ心のケアセンター, 認定作業療法士)